

日本一の商人になりたい 安田 善次郎

日本を代表する銀行の創立者 日本初の保険会社を設立 東京大学の安田講堂などを寄付



1838 (天保9) 年11月25日—1921 (大正10) 年9月28日

貧しい中で家計を助ける

江戸時代末期の1838 (天保9) 年、新川郡富山町 (現富山市) の鍋谷横町で生まれました。父は富山藩の下級武士でした。家は貧しく、善次郎も子どものときから畑

仕事を手伝ったり、野菜を売りに回ったりしました。また、貯金を心がけるなどして家計を助けてました。



善次郎の生家

江戸に出た善次郎の誓い

- ・他人に頼らず、一生懸命働くこと
- ・うそを言わないこと
- ・収入の2割は必ず貯蓄すること

善次郎はこの誓いを一生守り通しました。

国を動かす大商人になりたい

当時は厳しい身分制度がありました。下級武士である善次郎も身分の高い武士に憧れよう教え込まれていました。

ある日、善次郎は富山の街で、身分の高い武士が立派な駕籠を見送っている姿を目にしました。「駕籠の中にいるのはだれか」と周りの人に尋ねたところ、殿様にお金を貸している大商人の使いだとい

商人は武士よりも身分が低いと考えられていたので、この光景に善次郎は驚きました。お金の力を悟った善次郎は、「わたしも国を動かす大商人になりたい」と決意しました。

19歳になった善次郎は、商人になるため江戸に行きました。

まじめに働き、商人として成功

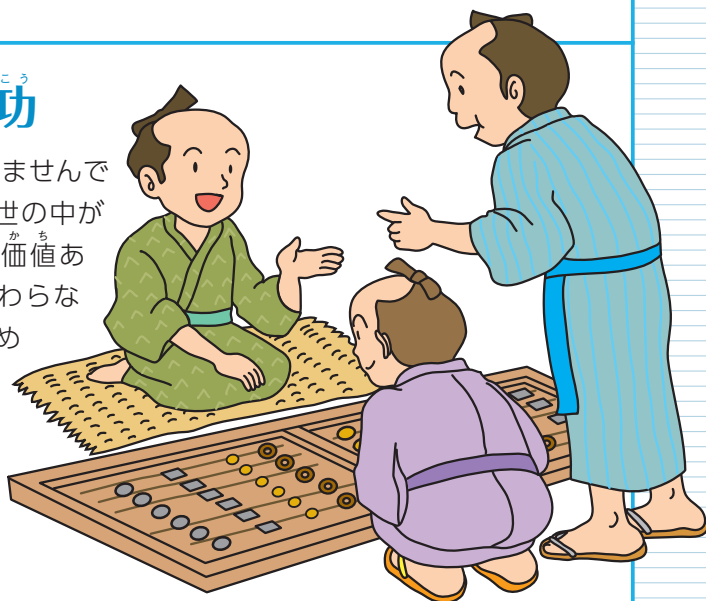
善次郎はおもちゃ屋や海産物商と両替商*を営む店などで6年間修業した後、25歳で独立しました。

初めは、戸板の上に小銭を並べた両替店を開きました。商売は成功し、3年後に両替店「安田商店」として店を構えました。

このころ、幕府が両替商たちに金貨や銀貨を買い集めるよう命じました。他の両替商は強盗にあう

ことを恐れて協力しませんでした。善次郎は「世の中が変わっても、本当に価値ある金銀の値打ちは変わらない」と考えて買い集めました。

熱心に働く善次郎の信用は高くなり、商売はどんどん大きくなっていきました。



*両替商【りょうがえししょう】江戸時代には金貨、銀貨、銭貨の3種類が使われ、両替商はこれらの貨幣を交換しました。お金を貸し付けたり、預金を受け付けたりしたほか、にせものの貨幣を見分ける目利きも大切な仕事でした。



お金を活かし、より良い社会を

明治時代になると、商人たちはお金を出し合って銀行をつくるようになりました。

善次郎も第三国立銀行をつくり、代表である頭取となりました。また、安田商店を基に安田銀行をつくり、全国に支店を増やしていきました。また、お互いに助け合う仕組みが必要だと考えた善次郎は、日本で初めての保険会社をつくりました。

「日本の金融王」といわれた善次郎の財産は、今のお金にすると約3000億円にもなりました。善次郎は、このお金を社会のために使おうと考えました。富山県出身の実業家・浅野総一郎 (→32ページ) など、たくさんの人たちの事業に資金を出して応援しました。

また、東京の日比谷公会堂を寄付したり、東京帝国大学 (現東京大学) に講堂を寄付したりしたほ

か、富山県の鉄道や学校の建設などにも多くの寄付をしました。



東京大学の安田講堂



日比谷公会堂 (千代田区観光協会提供)



安田銀行 (現みずほ銀行) 本店

夢や志をかなえたポイント

- ・いざというときのために貯蓄する
- ・自分が良いと信じたことは実行する
- ・信用を大切にす

豆知識 善次郎は「安田商店」を開店したころから死の前日までの50年間以上、1日も欠かさず日記をつけていました。

1838 (天保9)	0歳
新川郡富山町の鍋屋横町に生まれる	
1857 (安政4)	19歳
江戸へ出て、おもちゃ屋などで修業	
1863 (文久3)	25歳
独立して露天両替商を始める	
1864 (元治元)	26歳
安田屋を開業	
1866 (慶応2)	28歳
安田屋を安田商店と改め、両替専業とする	
1876 (明治9)	38歳
第三国立銀行を設立	
1879 (明治12)	41歳
安田銀行を設立	
1882 (明治15)	44歳
日本銀行の理事となる	
1887 (明治20)	49歳
帝国ホテルなどの会社設立に参加	
1893 (明治26)	55歳
保険会社を設立	
1914 (大正3)	76歳
富山市立職工学校などへ寄付をする	
1921 (大正10)	82歳
東京帝国大学に講堂を寄付したのち亡くなる	

コラム ぜいたくな暮らしを嫌った善次郎

お金持ちになった後も、善次郎の生活ぶりはたいへん質素でした。食事はご飯のほかに汁物とおかず1品という「一汁一菜」を続け、無駄使いをしないよう心がけていました。健康にも気を使っていたそうです。



晩年の善次郎